

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 永井 務

論 文 題 目 アメリカ知識人の社会思想と批判理論
—左翼知識人に焦点を当てて—

論文審査担当者

主 査 名古屋大学大学院環境学研究科 教 授 黒田 由彦

副 査 名古屋大学大学院環境学研究科 教 授 丹辺 宣彦

副 査 名古屋大学大学院環境学研究科 准教授 河村 則行

副 査 名古屋大学大学院環境学研究科 准教授 室井 研二

論文審査の結果の要旨

本論文は、19世紀末から第2次世界大戦を経て現代までに至るアメリカ知識人、とりわけ左翼知識人に焦点を当て、その思想の変遷をアメリカ社会の経済・政治的動向と関連させながら、知識社会学の視角から論じたものである。

社会学において、アメリカ知識人、とりわけ左翼知識人に関しては、高橋徹の論考がある（「現代アメリカ知識人論—文化社会学のために」）。高橋は、1950年代後半から1970年代前半の約20年間のニューレフト（青年運動・対抗文化運動）を取り上げ、それらが1970年代後半から1980年代中頃の「新しい社会運動」に先行するモデルであったと位置づけた。高橋によれば、それら「新しい社会運動」は、後期資本主義国家における「市民社会」の再構築、換言すれば、「ポスト・ブルジョア市民社会」（Cohen 1985:669-70）への道筋を探ったものである。しかしながら、高橋の考察は時間的範囲が20年間と限定的であり、知識人の思想の全体的スケッチにすぎず、本格的な検討と言えるものではなかった。本論文は、高橋の意図を継承し、考察の時間的範囲を大幅に拡大し、左翼知識人の思想的展開とそれぞれの思想の特性、そしてそれが社会情勢、特に社会運動に及ぼした影響を丹念に論じた。

本論文が明らかにした知見は、第一にヨーロッパ資本主義とは異なる特性をもったアメリカ資本主義に制約されながら、ヨーロッパの左翼知識人とは異なる独特の思想をアメリカ左翼知識人が発展させてきたこと、第二に構造主義やフランクフルト学派などヨーロッパの様々な思想潮流に影響されながらも、アメリカ左翼知識人の思想の根底には、アメリカ固有の哲学であるプラグマティズムがあり、アソシエーションにより構成された自由で開放的な市民社会が彼等にとっての追求すべき理念であったこと、第三に社会主義・共産主義がタブーとなっているアメリカにおいて、左翼知識人にとっての社会的目標があらゆる労働の場における疎外からも、あるいは高度産業社会における物象化からも、さらには様々なマイノリティに対する差別・抑圧からも解放されたポスト・ブルジョワ市民社会であったこと、以上である。

本論文の意義は、以下の3点である。第一に、アメリカの左翼知識人の思想とその意義というテーマに関する今後の研究にとって標準となる研究だという点である。先述のように、このテーマに関する業績としては高橋徹の研究があるが、本論文は高橋による研究の射程の短さという限界を越え、20世紀における左翼知識人の思想の変遷を一貫した視点から記述したという点において、今後のこの分野における一つの標準となる地位を築いたと評価できる。第二に、左翼知識人について、その社会思想における社会的意義を見ると同時に、思想的純粋さ故に現実の社会運動に対しては限定的な影響しか与えなかったという限界を指摘している点である。本論文は、アメリカの政治において社会体制の変革（資本主義か、社会主義かという選択）が争点になりえなかったのはなぜかという問題に対して、従来あまり指摘されてこなかった視点を提出したと言える。第三に、本論文は、左翼知識人が資本主義の宗主国として世界に君臨するアメリカ社会の矛盾を抉り出すことを通じて、社会を相対化する批判的視点を世代を超えて社会のなかに継承する役割を果たしたことを明らかにしたという点である。たとえば、2016年アメリカ大統領選において「民主社会主義」を掲げたサンダーズ候補が健闘したことは記憶に新しい。社会主義を許容しない社会的風土のなかで、なぜサンダーズ候補のような政治家が出現することができたのか、本論文はその社会的背景を理解する糸口を提供しているといえる。

以上のように、本論文は20世紀アメリカ左翼知識人の社会思想の全体像に関する理解、さらには社会学における知識社会学の研究の進展に貢献するものであり、本論文の提出者永井務氏は、博士（社会学）の学位を授与する資格があるものと判定した。